

## 天翔ける船

## A Ship Sails Through the Sky

石村 智\*

Tomo ISHIMURA\*

\*：東京文化財研究所

\*：National Research Institute for Cultural Properties

キーワード 神話・船・古墳時代・垂直的他界観・水平的他界観  
 Keywords myth, ship, Kofun period, otherworld vertical, otherworld horizontal

## Abstract

Japanese mythology features several ships with names associated with heaven or birds. Archaeological evidence reveals that depictions of both ship and bird can be found among artifacts from the Kofun period (3rd to 7th centuries). The Japanese word “ama” means both heaven and sea. This suggests that in ancient Japan there was a concept that the heavens and the sea were continuous. We consider that vertical and horizontal views of the afterlife coexisted in ancient Japan, and the ships which are associated with the heavens and birds reflect this view of the afterlife.

## はじめに

日本の神話の中には、天もしくは鳥と関連付けられた名前を持つ船がいくつか登場する。それはまさに「天翔ける船」を表現したかのようである。

その中でも有名なものは、出雲の国譲りの神話の中で登場する「天鵠船」である。高天原から派遣された天津神たちは出雲の国に降り立ち、葦原中国を支配する国津神の代表である大国主神に国譲りを迫る。それに対して大国主神は、自分の前にまず息子の八重事代主神に尋ねるように言った。そこで天津神たちは使者を立て、熊野諸手船と呼ばれる船に乗って事代主神の元に向かった。これに対して事代主神は国譲りを承諾し、自身は青柴垣の中に身を隠したとされる。『日本書紀』ではこの熊野諸手船の別名として「天鵠船」という名前が記されている。一方で同じ神話を記した『古事記』の記述では、事代主神のもとに派遣された使者の名前が「天鳥船神」ということになっている。

神話の中にはこの他にも、天もしくは鳥と関連付けた船の名前を散見する。「鳥之石楠船」や「天磐櫂船」、また物部氏の起源の伝承で語られる「天磐船」もまた、同じ系統の名称と考えられる。

ではなぜ船が天もしくは鳥と関連付けられるのであろうか？ ひとつには船が速く進む様子を、天を飛ぶ鳥になぞらえたものと考えることが出来るだろう。しかしいくつかの考古学資料を見ると、船と鳥の関連を示唆するものをいくつか見出すことが出来る。その背景には、古代の日本列島には船と鳥を関連付ける何らかの観念があったのではないか、とも考えられるのである。

そこで本論では、古墳時代の考古学資料を対象として、船と鳥の関連を示唆する事例を検討することとしたい。

## 船にともなう鳥

船と鳥の関連を示唆する資料のうち最も古い段階のものとなるのが、古墳時代前期の前方後円墳

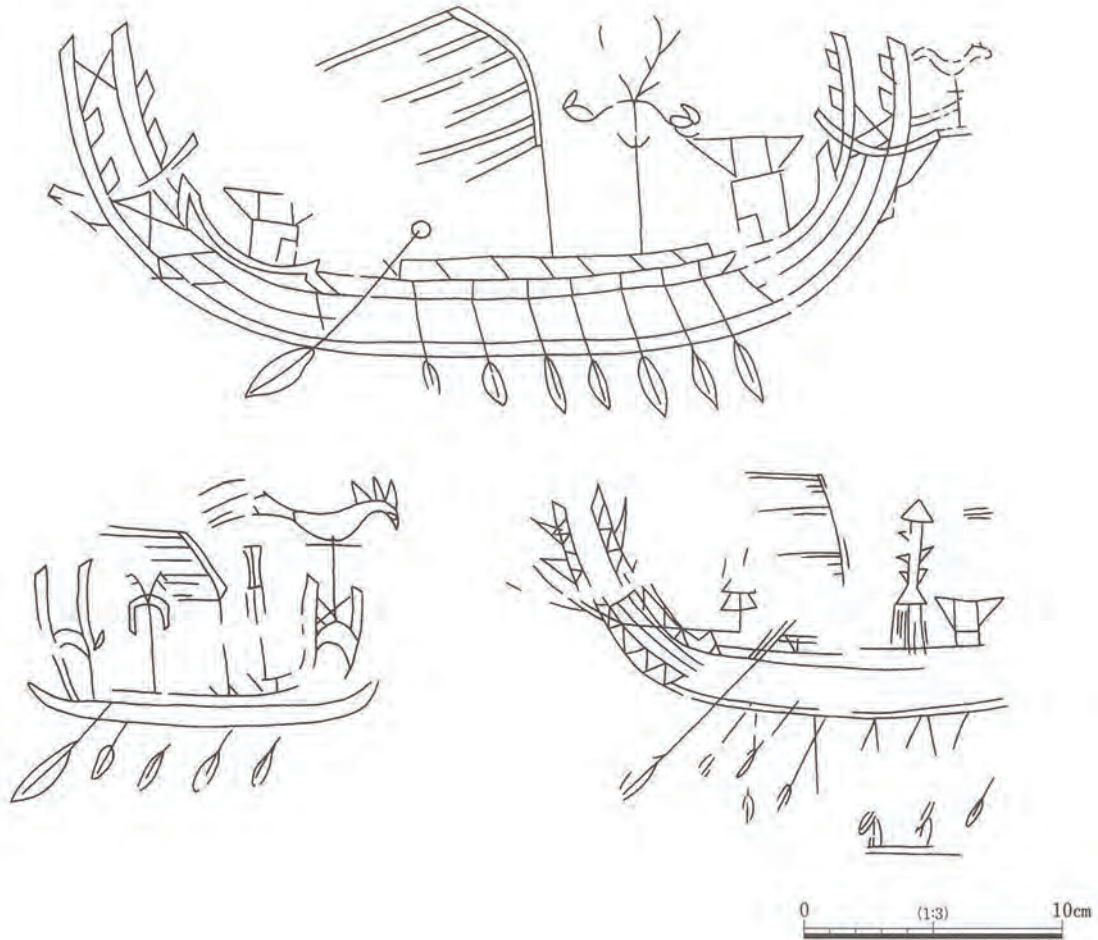


図1：東殿塚古墳出土の埴輪に描かれた船の絵画<sup>1)</sup>

である東殿塚古墳（奈良県天理市）出土の埴輪に描かれた絵画である。それは円筒埴輪の器壁に線刻で描かれたものであり、合わせて三隻の船が描かれているが、そのうちの二隻には船主に鳥の表現が描かれているのを見ることが出来る（図1）。その鳥の頭部にはトサカのような表現が見られるので、ニワトリを表現したものかもしれない。

これらの船には鳥以外にも、船の中央に旗もしくは吹き流しのようなものが立てられているのに加え、樹木のようなものや様々な形をした竿状の器物が立てられている。こうした表現は、古墳時代中期の前方後円墳である宝塚一号墳（三重県松坂市）から出土した船形埴輪にも見ることが出来、それらは大刀や蓋きぬがさといった儀礼的な器物である可能性が高い。そのためこの絵画に表現された船は、実用的な船を描いたというよりも、葬送船のような儀礼的な用途に用いられる船を描いた可能性が高いと推測される。

古墳時代中期になると、船形埴輪に鳥の表現が

ともなうものが現れる。林遺跡（大阪府藤井寺市）から見つかった船形埴輪の破片の中には鳥を象ったものが含まれており、船首に取り付けられていたものと推定復元される（図2）。なおこの鳥にはトサカの表現はなく、全身のプロポーションはハトに似ているようにも見える。

古墳時代後期になると、古墳の石室に絵画が描かれた装飾古墳の中に、船と鳥の表現がなされた事例を見ることが出来る。珍敷塚古墳（福岡県うきは市）では船首に鳥の表現がみとめられ、また鳥船塚古墳（福岡県うきは市）では船首と船尾にそれぞれ鳥の表現がみとめられる（図3）。またいずれの絵画においても、船の上に同心円の表現がなされていることは興味深い。これが何を表しているかについては様々な説があるが、ひとつには太陽もしくは月といった天体を表したものではないかとする説がある。

以上、古墳時代における船と鳥の関連を示唆する三つの事例を見てきた。ひとつ目の東殿塚古墳

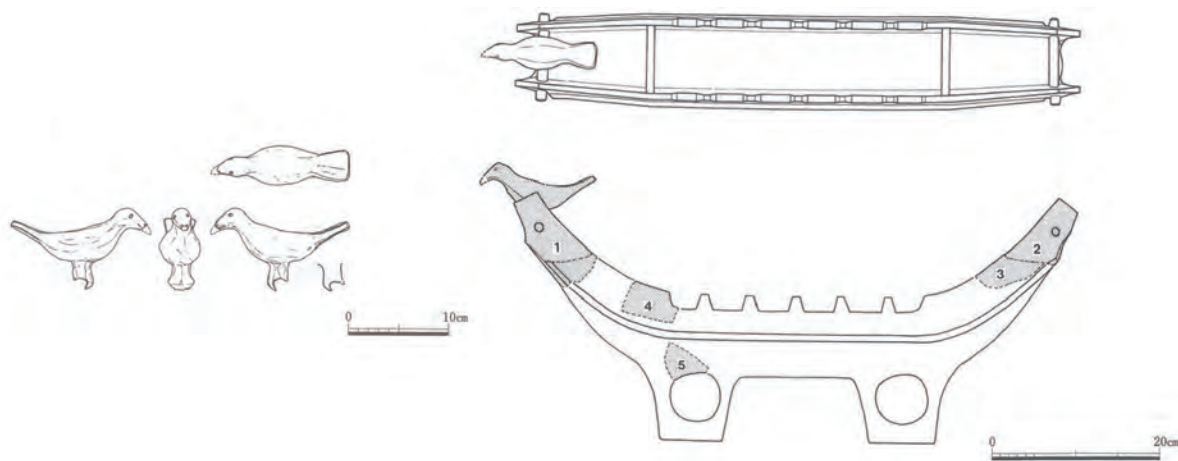


図2：林遺跡出土の船形埴輪<sup>2)</sup> 鳥を象った部位（左）と船形埴輪の全体の復元図（右）

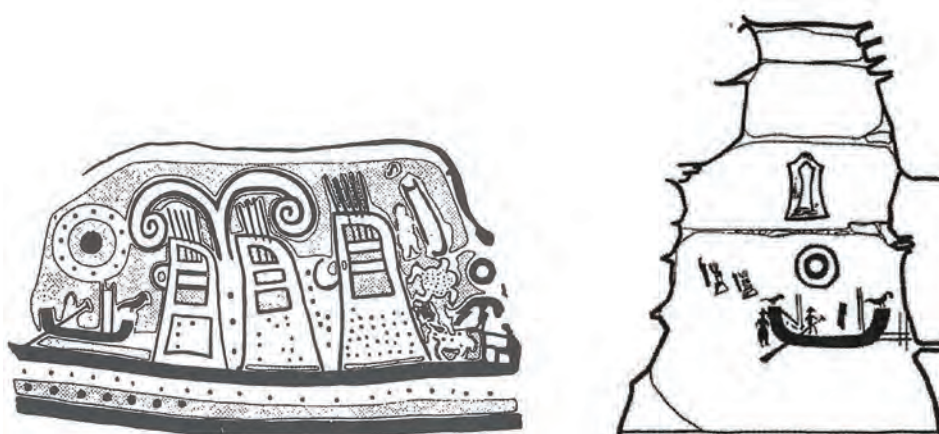


図3：装飾古墳に描かれた船と鳥の表現 珍敷塚古墳（左）<sup>3)</sup>と鳥船塚古墳（右）<sup>4)</sup>

が古墳時代前期、ふたつ目の林遺跡が古墳時代中期、みつつ目の珍敷塚古墳・鳥船塚古墳が古墳時代後期の遺跡であることから、およそ四百年にわたる古墳時代を通じて船と鳥を関連付ける観念が存続した可能性が高いと考えられる。

あま あま  
天と海

ではなぜ船と鳥が関連付けられるのであろうか？ そのことを考える上で鍵となるのが、「天」と「海」がともに「あま」と読むことが出来ることであると筆者は推測する。

言うまでもなく天と海はまったく異なるものである。しかし古代の日本列島には天と海の間に近い関連があるという観念が存在したのかもしれない。もしそうならば、天を飛ぶ鳥と、海を走る船との間に、古代の人々は象徴的な類似性を認めたのかもしれない。

ではなぜ天と海が近いものとして関連付けられるのであろうか？

筆者の考えはこうである。水平線を思い浮かべて頂きたい。天と海が水平線を介して接している。遠い彼方で、天と海はつながっているという観念が古代の人々の認識にもあったのではないか、というものである。

垂直的の世界観と水平的世界観

天と海という二項的な観念は、神々が住む世界や、死んだ人間の魂の行先といった、いわゆる他界の観念とも結び付いていると筆者は考える。

『古事記』や『日本書紀』に表される世界観においては、神々が住む世界、すなわち高天原は天に存在し、死者の行先である黄泉国は地中にあると考えられている。こうした他界観は垂直的の世界観、すなわち他界は現世の上下にある、と言うこ

とが出来る。こうした世界観は世界的にも広く分布し、キリスト教の「天国と地獄」や仏教の「極楽と地獄」の観念も同様の垂直的他界観と言うことが出来るだろう。

一方で他界が海の彼方、もしくは地理的に遠い場所にあるという観念を持つ人々も決して少なくない。例えば奄美群島や琉球諸島の人々は伝統的に、海の彼方にある「ネリヤカナヤ」や「ニライカナイ」と呼ばれる場所が、先祖が暮らす場所であり、死者の魂が帰る場所であるという観念を持っている。またポリネシアの人々は伝統的に、やはり海の彼方にある「ハワイキ」と呼ばれる場所が、先祖の土地であるとともに死後の世界であるという他界観念を持っている。こうした他界は、現世と地理的につながって存在すると認識されていることから、これを水平的他界観と言うことが出来るだろう。

それでは古代の日本列島における他界観ははたしてどのようなものであったのだろうか？ 『古事記』や『日本書紀』に表された他界観は垂直的他界観が支配的であるように見えるが、水平的他界観もまた合わせて存在した可能性があるのではないだろうか？

その一例が『古事記』や『日本書紀』で語られる「山幸彦と海幸彦」の神話である。これは海幸彦から借りた釣針をなくした山幸彦が、小舟に乗って海の神である綿津見神の宮殿に辿り着き、海神の娘である豊玉姫と結婚して帰還するという物語である。この神話は民話「浦島太郎」のプロトタイプであることに加え、同様の「釣針をなくし、それを探しに異界に赴く」という神話はいわゆる「釣針喪失譚」として、環太平洋地域を中心に世界中に分布する。そして海の彼方に異界があるというのは、水平的他界観を反映したものと考えられる。

古代の人々の世界観においては、垂直的他界観と水平的他界観の両方が存在していたのではないかと筆者は考えている。そのため、天という垂直的な彼方と、海という水平的な彼方が、「あま」という同じ言葉で表されたのだと考えている。そうした観念があったからこそ、船と鳥が関連あるものとして合わせて表現されたのだと考えるのだ。

## おわりに

神話の中に表された「天翔ける船」を手がかりに、古代の日本における他界観について考察を試みた。そしてそこには垂直的他界観と水平的他界観の両方の観念が入り混じっている可能性が高いことを示した。そのことは「あま」という言葉の読みが、「天」と「海」の両方を指し示していることにも表れている。そしてその言葉が現代の日本語の中にも生きていることは、今日の日本列島に生きる私たちの中にも古代の観念が埋め込まれていることを表しているのかもしれない。

## 文献

- 1) Tenri City Board of Education: The Nishitonotsuka and Higashitonotsuka tumli, Tenri City buried Cultural Properties Research Report Vol. 7., 2000  
天理市教育委員会『西殿塚古墳・東殿塚古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第7集, 2000
- 2) Fujiidera City Board of Education: Survey on the Hayashi site, Archaeological Excavation Report of the Ishikawa basin archaeological sites IX, Fujiidera City Cultural Properties Research Report vol. 10., 1994  
藤井寺市教育委員会「林遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告 IX』藤井寺市文化財報告第10集, 1994
- 3) Teijiro Mori: The Mezurashituka tumulus, in Yukio Kobayashi ed., Decorated Tumuli, Heibonsha, 1964  
森貞次郎「珍敷塚古墳」小林行雄編『装飾古墳』平凡社, 1964
- 4) Ukiha City Board of Education: The Torihunetsuka Tumulus, National Designated Site, Ukiha City Cultural Properties Research Report vol. 25., 2018  
うきは市教育委員会『国指定史跡鳥船塚古墳』うきは市文化財調査報告書第二十五集, 2018